

津

端

亨

編纂

現代短歌分類辭典

新裝判
57卷

現代短歌分類辞典

新装版 57 卷

通卷 2 1 5

平成八年四月二十日発行

定価一七、四〇〇円

著者発行
兼印刷者

津 端 亨

発行所

現代短歌分類辞典刊行所

代表 津 端 亨

〒
345

埼玉県北葛飾群杉戸町宮前一九六―五

電話(〇四八〇)三八―〇〇四〇番

振替 東京三―九三一―四

(ISBN 4-87706-215-7)

目次

目次

	歌数	頁数		歌数	頁数		歌数	頁数
もみじ〔紅葉(続き)〕	一三〇	一	ももながに〔股長に〕	一〇	五四	もりかけ〔森蔭〕	九六	一一一
もみじあおい〔紅葉葵・紅蜀葵〕	四	三三	ももひき〔股引き〕	三	五四	もりそば〔盛り蕎麦〕	一	一一三
もみじうつろふ〔紅葉榎〕	一	三三	ももやさどり	一	五四	もりつち〔盛り土〕	五	一一三
もみじかさ〔紅葉笠・紅葉傘〕	一	三三	ももやま〔桃山〕	三三	五四	もりばな〔盛り花〕	三	一一三
もみじがり〔紅葉狩〕	一	三三	ももやまじだい〔桃山時代〕	一	五五	もりもり	三	一一四
もみじは〔紅葉葉〕	一三	三三	ももよ〔百代・百世〕	一〇	五五	もりもりと	三	一一四
もみじやま〔紅葉山〕	一四	三三	ももよ〔百夜〕	五	五六	もる〔漏る・洩る〕	五六	一一四
もみすり〔萩摺り〕	五	三四	ももわれ〔桃割れ〕	五	五六	もる〔盛る〕	六四	一二五
もみづ〔紅葉〕	一	三四	もや〔霧〕	九四〇	五六	もる〔守る〕	四	一二七
もみほぐす〔揉み解す〕	三	三四	もやす〔燃やす〕	二三	八一	もろ	二	一二七
もむ〔揉む〕	一六	三四	もやふ	一	八二	もろい〔脆い〕	二	一二七
もめごと〔揉め事〕	一	三四	もやもや	一四	八二	もろく〔脆く〕	七〇	一二八
もめる〔揉める〕	三	三五	もゆ	一	八二	もろこえ〔諸声〕	一九	一二〇
もめん〔木綿〕	三六	三五	もゆ〔燃〕	三	八二	もろこし〔蜀黍〕	一〇三	一二〇
もも〔桃〕	五一四	三六	もよ	四	八二	もろこし〔唐土〕	一	一二三
ももいろ〔桃色〕	五〇	四九	もよう〔模様〕	四二	八三	もろし〔脆し〕	二四	一二三
ももえ〔百重〕	一九	五〇	もよおす〔催す〕	一七	八四	もろて〔双手・諸手〕	八三	一二四
ももえさす〔百枝差〕	一	五一	もよぎ〔萌黄〕	四五	八四	もろとも〔諸共〕	一七七	一二六
ももくさ〔百草〕	二二	五一	もより〔最寄り〕	二	八六	もろに	七	一二三
ももしき〔百敷〕	六	五一	もらう〔貰う〕	五	八六	もろはだ〔諸肌〕	二	一二三
ももしきの〔百敷の〕	七	五二	もらす〔漏らす・洩らす〕	五九	八六	もろびと〔諸人〕	四〇	一二三
ももだち〔肌立〕	一	五二	もり〔守り〕	九	八八	もろふす〔諸伏す〕	一	一二三
ももてらす〔百照〕	一	五二	もり〔森・杜〕	七九七	八八	もろみ〔諸味・饈〕	一三	一二三
ももとせ〔百歳〕	九	五二	もり〔鋤〕	五一〇	九	もろむく〔諸向く〕	一	一二四
ももととり〔百鳥〕	四六	五二	もりあがる〔盛り上がる〕	五五	一〇九	もろもろ〔諸諸・諸々〕	一三〇	一二四

もん〔門〕	九四七	もんばつ〔門閤〕	一一七五	やおしお〔八百潮〕	一三一九二
もん〔紋〕	三二一	もんばん〔門番〕	二一七五	やおもて〔矢面〕	三一九二
もんえい〔門衛〕	一一六七	もんび〔門扉〕	五一七五	やおや〔八百屋〕	一八一九二
もんか〔門下〕	三一六七	もんふく〔紋服〕	四一七五	やおよろず〔八百万〕	五一九三
もんがい〔門外〕	八一六七	もんぺ	一一一七六	やおよろずのかみ〔八百万の神〕	二一九三
もんかせい〔門下生〕	一一六八	もんもう〔文盲〕	二一七六	やがい〔野外〕	三一九三
もんきーぽっと〔モンキーポット〕	一一六八	もんもん〔悶悶〕	二一七六	やがく〔夜学〕	一八一九三
もんすてら〔モンスター〕	一一六八	もんよう〔文様・紋様〕	一七一七六	やがくせい〔夜学生〕	三一九四
もんく〔文句〕	八一六八	や〔矢〕	七一七七	やかた〔屋形・館〕	七八一九四
もんげん〔門限〕	一一六八	や	八一七九	やかたぶね〔屋形船〕	三一九六
もんこ〔門戸〕	一一六八	や	一一七九	やがて〔饗て〕	六七九一九六
もんさつ〔門札〕	六一六八	や	八一七九	やかましい〔喧しい〕	四二二六
もんし〔門齒〕	二一六九	や	四一七九	やかましき〔喧しさ〕	二二二六
もんしょう〔紋章〕	一六一六九	やいた〔矢板〕	二一八〇	やから〔族〕	一一二七
もんしろちょう〔紋白蝶〕	一六一六九	やいなや〔や否や〕	九七一八〇	やかん〔夜間〕	四二二七
もんじん〔門人〕	六一七〇	やいば〔刃〕	六三一八三	やかん〔薬缶・薬缶〕	七二二七
もんぜき〔門跡・門址〕	六一七〇	やいん〔夜陰〕	一一一八四	やき〔夜気〕	四三二二七
もんぜん〔門前〕	七三一七〇	やうやう〔漸う〕	四一八五	やぎ〔山羊〕	一八八二二八
もんぜんまち〔門前町〕	二一七二	やえ〔八重〕	二六一八五	やきいも〔焼き芋〕	一一三四
もんだい〔問題〕	三一七二	やえい〔野宮〕	九一八八	やきたて〔焼きたて〕	五二三四
もんちゅう〔門柱〕	七一七三	やえざき〔八重咲き〕	六一八九	やきつく〔焼き付く〕	一五二三四
もんてい〔門弟〕	四一七三	やえざくら〔八重桜〕	五九一八九	やきつくす〔焼き付くす〕	一二三五
もんと〔門徒〕	一一七四	やえつばき〔八重椿〕	六一九〇	やきとり〔焼き鳥〕	三二三五
もんとう〔門灯〕	一八一七四	やえば〔八重歯〕	一一九一	やきばた〔焼き畑〕	一二三五
もんどう〔問答〕	一一七四	やえはなざくら〔八重花桜〕	三一九一	やきゅう〔野球〕	三二二五
もんどころ〔紋所〕	一一七五	やえむぐら〔八重葎〕	七一九一	やきゅう〔野牛〕	四二二六
もんどりうつ	一一七五	やえやまぶき〔八重山吹〕	一五一九一	やぎょう〔夜業〕	五三二二六
もんない〔門内〕	一一七五	やえん〔夜宴〕	一一九二	やきよく〔夜曲〕	三二二八

やきん〔野禽〕	一 二三八	やくそう〔薬草〕	五二 二四六	やけ〔自棄〕	一六 二五七
やきん〔夜勤〕	一六 二三八	やくそく〔約束〕	五〇 二四八	やけあと〔焼け跡・焼け址〕	三六 二五八
やく〔厄〕	七 二二九	やくだつ〔役立つ〕	七 二四九	やけい〔夜景〕	一〇 二五九
やく〔妬く〕	二 二二九	やくちゅう〔訳注〕	一 二四九	やけい〔夜警〕	六 二五九
やく〔焼く〕	三六三 二二九	やくづき〔厄月〕	一 二四九	やけいし〔焼け石〕	二 二五九
やぐ〔夜具〕	四四 二三九	やくて〔約手〕	一 二四九	やけおちる〔焼け落ちる〕	二 二五九
やくいん〔役員〕	三 二四一	やくとう〔薬湯〕	一六 二五〇	やけこげ〔焼け焦げ〕	六 二五九
やくえき〔薬液〕	一一 二四一	やくどう〔躍動〕	二 二五〇	やけじに〔焼け死に〕	七 二六〇
やくげん〔約言〕	一 二四一	やくどし〔厄年〕	三 二五〇	やけつく〔焼け付く〕	四 二六〇
やくざ	四 二四一	やくにん〔役人〕	八 二五〇	やけつち〔焼け土〕	六 二六〇
やくざい〔薬剂〕	三 二四一	やくば〔役場〕	一七 二五一	やけど〔火傷〕	一六 二六〇
やくさつ〔扼殺〕	一 二四二	やくび〔厄日〕	七 二五一	やけのこる〔焼け残る〕	一七 二六一
やくし〔訳詩〕	一 二四二	やくびょう〔疫病〕	五 二五一	やけのはら〔焼野原〕	一六 二六一
やくし〔薬師〕	二〇 二四二	やくひん〔薬品〕	五 二五一	やけひばし〔焼け火箸〕	一 二六一
やくしじ〔薬師寺〕	三五 二四二	やぎぶし〔八木節〕	二 二五二	やけやま〔焼け山〕	一 二六一
やくしどう〔薬師堂〕	七 二四三	やくぶつ〔薬物〕	一 二五二	やける〔焼ける〕	三三 二六二
やくしにょらい〔薬師如来〕	一五 二四四	やくぶん〔訳文〕	一 二五二	やけん〔野犬〕	一九 二六三
やくしま〔屋久島〕	三 二四四	やくほ〔薬舗〕	一 二五二	やげん〔薬研〕	二 二六四
やくしゃ〔役者〕	二七 二四四	やくほん〔訳本〕	二 二五二	やこう〔夜光〕	七 二六四
やくしゃ〔訳者〕	一 二四五	やくみ〔薬味〕	一 二五二	やこう〔夜行〕	九 二六四
やくしゅ〔薬酒〕	二 二四五	やくめ〔役目〕	七 二五二	やこう〔屋号〕	一 二六四
やくしゅ〔薬種〕	一 二四五	やくよけ〔厄除け〕	一 二五三	やこうぐん〔夜行軍〕	六 二六四
やくしょ〔役所〕	二 二四五	やぐら〔櫓〕	九 二五三	やこうしゃ〔夜行車〕	一四 二六五
やくしょ〔訳書〕	二 二四六	やぐらだいこ〔櫓太鼓〕	一 二五五	やこうどけい〔夜光時計〕	一三 二六五
やくしん〔躍進〕	二 二四六	やぐるま〔矢車〕	三〇 二五五	やこうとりょう〔夜光塗料〕	五 二六五
やくす〔約す〕	四 二四六	やぐるまぎく〔矢車菊〕	七 二五六	やこうれしゃ〔夜行列車〕	一 二六六
やくす〔訳す〕	三 二四六	やぐるまそう〔矢車草〕	二六 二五六	やごとなし〔無止事〕	九 二六六
やくする〔約する〕	一 二四六	やくわり〔役割〕	一 二五七		二 二六六

やごろ〔矢頃〕	二二六六	やしゅう〔夜襲〕	一二二九〇	やすらか〔安らか〕	一七九三〇九
やさい〔野菜〕	一二二六六	やじゅう〔野獸〕	九二九一	やすらぎ〔安らぎ〕	一五四三二四
やさかじんじゃ〔八坂神社〕	一二七〇	やしよく〔夜食〕	一〇二九一	やすらぐ〔安らぐ〕	五九三二八
やさし〔優し〕	三七二七〇	やじり〔矢尻・鏝〕	七二九二	やすらけく	一八三三〇
やさしい〔易しい〕	一二七九	やじるし〔矢印〕	二二九二	やすらけし	一一三二一
やさしい〔優しい〕	二二七九	やしろ〔社〕	一六二二九二	やすらげる〔安らげる〕	四三二一
やさしさ〔優しさ〕	一三二七九	やしん〔野心〕	六二九六	やすらう	二二二一
やさしむ	一五二八〇	やじん〔野人〕	七二九六	やすり〔鑢〕	八三二一
やさま〔矢狭間〕	一二八〇	やすい〔安い〕	二二九七	やせい〔野性〕	一七三三二
やし〔香具師〕	一〇二八〇	やすい〔安寝〕	三四二九七	やせい〔野生〕	一八三三二
やし〔椰子〕	七四二八一	やすうり〔安売り〕	一二九八	やせぎす〔瘦せぎす〕	二二三三
やじ〔野次〕	二二八三	やすきぶし〔安来節〕	二二九八	やせこける〔瘦せこける〕	一三三三
やしおかえで〔八染楓〕	一二八三	やすくにじんじゃ〔靖国神社〕	六二九八	やせち〔瘦せ地〕	一三三三
やしおじ〔八潮路〕	六二八三	やすし〔安し〕	六三二九八	やせほそる〔瘦せ細る〕	三三三三
やしき〔屋敷・邸〕	八五二八四	やすけし〔安けし〕	三三〇〇	やせやせ〔瘦せ瘦せ〕	二四三三
やしきあと〔屋敷跡〕	四二八六	やすね〔安値〕	五三〇〇	やせる〔瘦せる〕	五三三四
やしきうち〔屋敷内〕	四二八六	やすぶしん〔安普請〕	一一〇一	やせん〔夜戦〕	二三四
やしきぎ〔屋敷木〕	二二八六	やすまる〔休まる〕	一一〇一	やせん〔野戦〕	六三四
やしきまち〔屋敷町〕	一三二八七	やすみ〔休み〕	六九三〇一	やせんげかい〔野戦外科医〕	一三四
やしなう〔養う〕	二二八七	やすみどころ〔休み所〕	二二〇三	やせんそうこ〔野戦倉庫〕	一三四
やしのみ〔椰子の実〕	一五二八七	やすみび〔休み日〕	三三三〇三	やぜん〔夜前〕	一三五
やしま〔八洲・八島〕	四〇二八八	やすみやすみ〔休み休み〕	五三〇四	やせんびょういん〔野戦病院〕	二三五
やしま〔屋島〕	一〇二八九	やすむ〔休む〕	九三三〇四	やせんりょうり〔野戦料理〕	一三五
やしまくに〔八洲国〕	八二九〇	やすめる〔休める〕	八三〇六	やそ〔耶蘇〕	一二三五
やしや〔夜叉〕	四二九〇	やすもの〔安物〕	三三〇七	やそ	一三五
やしやぶし〔夜叉五倍子〕	三二九〇	やすやす〔易易〕	一七三〇七	やそう〔野草〕	三四三五
やしゅ〔野趣〕	一二九〇	やすやすと〔易易と〕	四五三〇七	やそきょう〔耶蘇教〕	三三六
やしゅ〔椰子油〕	一二九〇	やすやど〔安宿〕	二二〇九	やそくに〔八十國〕	一六三七

やそくにばら〔八十国原〕	一三七	やっきょう〔藥莢〕	六三九	やな〔魚鱗〕	一三七五
やそくま〔八十限〕	一二三七	やっきよく〔藥局〕	八三四〇	やなか〔谷中〕	二六三七五
やそじ〔八十路〕	一九三七	やっこさん〔奴さん〕	一三四〇	やながわ〔柳川〕	一八三七六
やそじま〔八十島〕	一六三八	やっこだこ〔奴虱〕	二三四〇	やなぎ〔柳〕	五四一三七六
やそせ〔八十瀬〕	四三九	やつこらさ	一三四〇	やなぎばし〔柳橋〕	一七三九〇
やそのみなと〔八十の湊〕	一三三九	やつす〔簀す〕	一三四〇	やなぎも〔柳藻〕	二三九一
やたい〔屋台〕	二五三九	やつて〔八つ手〕	一七二三四〇	やなぎらん〔柳蘭〕	八三九一
やたいみせ〔屋台店〕	六三三〇	やつてくる〔遣って来る〕	一三四五	やなみ〔家並み〕	一〇三九一
やたけ〔矢竹〕	一二三三〇	やつと	一三三四五	やなり〔家鳴り〕	二三九二
やたて〔矢立〕	四三三〇	やつとこさ	一三四六	やに〔脂・膠〕	二五三九二
やたに〔八谷〕	一〇三三〇	やつぱり〔矢っ張り〕	一四三四六	やぬし〔家主〕	五三九二
やたば〔矢束〕	一三三一	やつめうなぎ〔八つ目鰻〕	一三四七	やね〔屋根〕	七八六三九三
やたら〔矢鱈〕	七三三一	やつら〔奴等〕	五三四七	やねうら〔屋根裏〕	三〇四一五
やち〔谷地・野地〕	一〇六三三一	やつれ〔簀れ〕	一〇三三四七	やねくさ〔屋根草〕	六四一六
やちぐさ〔八千草〕	四六三三四	やてん〔夜天〕	二六三五〇	やば〔矢場〕	三四一六
やちだ〔谷地田〕	一一三三五	やど〔宿〕	七〇四三五一	やば〔野馬〕	一〇四一六
やちまた〔八街〕	二二三六	やと〔谷戸〕	二三三六九	やばけい〔耶馬溪〕	一四四一七
やちゅう〔谷地だも。〕	二二三六	やとう〔夜盜〕	二三七〇	やはずはんのき	一四一七
やちやなぎ〔谷地柳〕	一三三七	やどかり〔宿借り〕	六三七〇	やはずそう〔矢筈草〕	二四一七
やちよ〔八千代〕	二〇三三七	やどす〔宿す〕	二〇三七〇	やはり〔矢張り〕	四六四一七
やちよう〔野鳥〕	二三三七	やどちよう〔宿帳〕	三三七一	やばん〔野蠻〕	四四一九
やちん〔家賃〕	七三三八	やとな〔雇女〕	一三七一	やばん〔夜番〕	三四一九
やつ〔谷地〕	一三三八	やどなし〔宿無し〕	三三七一	やひ〔野卑〕	一四一九
やつお〔八峯〕	一三三八	やどぬし〔宿主〕	四三七一	やぶ〔藪〕	七〇四一九
やつかい〔厄介〕	五三三九	やどや〔宿屋〕	三三七一	やぶか〔藪蚊〕	四四二一
やつがしら〔八つ頭〕	一三三九	やどりぎ〔宿り木・寄生木〕	一七三七二	やぶかげ〔藪陰〕	一一四二一
やつがたけ〔八ヶ岳〕	九三三九	やどる〔宿る〕	六七三七三	やぶがらし〔藪枯・鳥斂苳〕	三四三
やつぎばや〔矢継ぎ早〕	一三三九	やどろく〔宿六〕	一三七五	やぶこうじ〔藪柑子〕	一四四三

やぶぐし〔藪越し〕	二四三
やぶさめ〔藪雨〕	五四三
やぶさめまつり〔流鏑祭〕	一四三
やぶそてつ〔藪蘇鉄〕	一四三
やぶつばき〔藪椿〕	一〇四三
やぶでまり〔藪手鞠〕	一四三
やぶはら〔藪原〕	八四四
やぶみょうが〔藪茗荷〕	一四四
やぶらん〔藪蘭〕	一一四四
やぶる〔破る〕	三六四四
やぶれ〔破れ〕	一二七四二六
やぶれめ〔破れ目〕	六四二九
やぶれる〔破れる〕	二四二九
やぼ〔野暮〕	二四二九
やぼう〔野望〕	六四三〇
やま〔山〕	七四〇四三〇
やまあい〔山間〕	三八四五七
やまあさみ〔山薊〕	四四五八
やまあじさい〔山紫陽花〕	一六四五八
やまあらし〔山荒らし〕	一四五九
やまあるき〔山歩き〕	三四五九
やまい〔病〕	五四四五九

計

一五六一六 首

もみじ【名詞】「紅葉（続き）」

芦の湖へただに下れる茅野はら槿紅葉あかくそここに染めり	光岡良二
あしびきの遠山もとにゆふつく日のこると見しは紅葉なりけり	黒田清綱
あしびきの山ふかくして紅葉の光れるくれなゐしたらむとす⑧	吉植庄亮
あしびきの山風ふけば紅葉の散りみだれをけふ見つるかも⑩	斎藤茂吉
足もとに音すと見ればくれなゐの紅葉散りたり明るき地に	窪田空穂
足許にどうだんつつじ紅葉して彼方に見せし“氷壁いかしき”①	印田巨鳥
足もとのすすきはほけて流れ青きはての山はだ紅葉に明るし⑪	金子薫園
飛鳥山けふもひねもす紅葉みてかへりくるまをてらす月かな①	昭憲皇太后
あすは散る紅葉の色のかなしさをみなさだ過ぐ今日ぞ知りける	矢沢孝子
④	
遊びたる野の家土産と幼児が欲張り持ちし紅葉捨てはじむ④	竹尾忠吉
愛宕山三笠の荘に動く霧ありて紅葉の濡るる朝かな⑦	與謝野晶子
あたたかい昼時雨。桜紅葉が一途に赤い。⑤	矢代東村
あたたかき国のめぐみとたちかへる天つ日かげに匂ふ紅葉あり④	吉野秀雄
(角川文庫)	
あたたかき山懐のところづらははれ紅葉はしづけかりけり⑨	尾山篤二郎
あたたかく紅葉にはやきて季なれど落葉する樹あり林の中に⑫	松村英一
新しき家に廻廊の朱は神垣の紅葉のうへにありて紛れず⑫	尾上柴舟
新しき廻廊の朱は神垣の紅葉のうへにありて紛れず⑫	尾上柴舟
あづま屋のまやははその薄紅葉秋のやどりとみるがうれしさ	福田行誠
あでやかに清けき紅葉の光りさまやいく山溪の遡き奥がここに⑧	吉植庄亮

あとさきに小犬つきくる丘の道松にまじりてはじ紅葉あかく⑩

(黎明)

あなさやけ桜に秋の花咲きて日光照り透く紅葉をまじゆ

あなめでたさくらの紅葉あかき日に高御座置く土御門殿②

あの紅葉の蔭まで行かなとそぞろにも庭に下り立つ草履をはきて

⑥

あはれなる鳶の紅葉は手に枯れぬ羽団扇に似る板屋紅葉も⑨

(春泥集)

尼が棲む紅葉の中の庵過ぎ柴橋渡る滝を聴きつつ

天城嶺は昏れつつ山の色変り道辺の紅葉の赤き群落⑫

あまのすむいそやの紅葉ほす網のめにかかるまで染てけるかな①

編笠岳をおほひつつみてはなやぐは米母にまじる岳樺紅葉②

(山鏡)

網棚に奥日光のいち早き紅葉をさして帰る一人旅④(現代短歌全集)

雨霧らふ稻田の道ゆあきしののみ寺を訪へば柿紅葉散る⑤

雨けふる松の林のをぐらきに照り沈みたる紅葉の色⑧

天地も声をひそめていく日さすがに山の紅葉もえそむ⑤

雨に散った紅葉を掃きよせてある今日のいくつかの計画⑤

雨に濡れし紅葉かざして来し人のあさりを買ひて駅に入りたり

雨の後をそのまま暮るる林泉のひとつとき明し夕映紅葉③

雨の日はいいよ暗し紅葉よりおつる雫を見つつなげかふ⑩

雨の間の光りあわただし時ならぬに紅葉となりて散れる槿の葉②

佐佐木信綱

若林牧春

與謝野晶子

川田順

與謝野晶子

柘植潮音

原三郎

昭憲皇太后

小宮良太郎

中原綾子

吉野秀雄

尾上柴舟

四賀光子

小宮良太郎

鷗木保

小宮良太郎

今井邦子

音馬実

雨ふるや白骨の溪のみちべなる草の紅葉は時すぎにけり①	大橋 松平
歩み入る森あさくしてかなたより紅葉を通す菜の畑と岡③	與謝野 寛
あらしとて引きかへすべき山路よりおくに紅葉は残りつるかな④	樋口 一葉
あらしのあと草の紅葉のくれなゐは地にしみつきて腐ちゆくらし②	大橋 松平
あらしふく梢の紅葉ちりぢりに行別れぬる世にこそ有けれ	久米 幹文
嵐ふくやまぢをゆけば松の葉も紅葉と共にみだれてぞちる①	明治 天皇
あらし山紅葉日和の寒き日に相見しあまひ忘れかねつも①	花田 比露思
嵐山さくらの紅葉ちりはてて松の古葉もこぼれけるかな①	明治 天皇
嵐山になは紅葉あり 人生の季節を過ぎし一行の前②	土岐 善麿
あらし山ふもとの寺のかねのおとに暮るる紅葉の色ぞさびしき③	樋口 一葉
荒立ちて吹きわかれゆく霧の中に浮きあがり来る岳樺紅葉②	小宮 良太郎
あら玉のとがのを山の青洩の白雲橋をおほへる紅葉①	蕨 真
あらはれて枝の末まで美しくしき紅葉に山はいまだ薄明②	與謝野 晶子
霞さへまじる時雨の束の間に櫨の紅葉は落ちつくしけり②	音馬 実
あらわれて枝の末まで美しくしき紅葉よ山はいまだ薄明②(岩波文庫)	與謝野 晶子
在りし日の兄が手入れの盆栽の鉢の蔭の紅葉いちじるし	村野 次郎
ありなれてしづかにあれば山沢に燃ゆる紅葉は日毎深みつ①	金子 信三郎
あるぞともつねはみざりし松かげの白膠木の紅葉あらはれにけり③	樋口 一葉
荒れに荒れし紅葉下照る公園を帰朝の友としづかにあゆむ④	山下 陸奥
あれはててとふ人もなきふる郷も紅葉ばかりはむかしなりけり③	樋口 一葉

青々とありしに汝をあゆませしこの暇路も草紅葉しぬ①	鈴木 幸輔
青苔の散紅葉掻くおこなひをすがしみゐたり音もこそせぬ⑤	吉野 秀雄
あをぞらに松ならび立つ高山の岩はな紅葉見よの札あり①	金子 元臣
青洩にただよふ紅葉岩はしる早瀬に乗りて見えなくなりゆく①	片岡 恒信
青洩の颯ろきよどみに主やすむ岩蔭寒し紅葉ちる谷①	青木 繁
青洩の水面ゆらぎて散り浮ける紅葉いざよふ舟の舳さきに	伊藤 左千夫
家にかかけし旗多ければゆくての紅葉みえぬなりけり②	明治 天皇
家づとに紅葉を折りてかへる人いづこいかなるところにもあり⑧	吉植 庄亮
いかに子等いそげ稍抜け向ひ山紅葉が上に雪の来ぬはや(石)	小杉 放庵
伊香保に来て日和つづけりセルを着て紅葉の山にひと日遊べり⑩	今井 邦子
息白く我が踏みいそぐ朝道は草の紅葉にしづく露霜⑥	若林 牧春
生きむ望み捨てざらめやも山還き雑木紅葉のつぎて燃ゆるを	原 菊枝
(多磨四)	
幾度か時雨来ぬらし蔵の壁おほへる蔭は紅葉となりつ②	音馬 実
幾段か岩を落ち来る水よりてつくる青洩に散り込む紅葉⑨	松村 英一
幾春を家風に泣いた四十路姿紅葉のたにに秋また暮れる①	青山 霞村
幾ひらの葉に葉をかさね砂庭に座どる嫁菜の下葉紅葉しぬ	宇都野 研
幾重なす裾を紅葉によるひつつおのれさかりて雲取の峰②	村野 次郎
生垣の躑躅紅葉の刈込線正しく長し夕明りのもと②	臼井 大翼
池心の夜泊石に縋り生ふる実生楓も紅葉せりけり③(角川文庫)	吉野 秀雄
池の上に枝さす紅葉ひしめきて降りくだす雨にぬれにけるかな③	尾山 篤二郎
池の上に枝さし出でし櫨の木の片枝紅葉づる色の美しさ①	上杉 一甫

池の面の 水はうごかず 紅葉ばの 二つ三つ浮きて 大寺はく
るる③

池の中の小島に一樹の楓あり水のおもてに紅葉を映す(溪流)

池水にうつる紅葉のさゆらぐはいま跳ねし鯉のあとにかもあらむ

①(青板)

池水に降りある鷺のへらへらと舞ひ上りたるが紅葉に入りぬ⑧

いけみづに柿の紅葉のちりうきてむらさめさむし秋のくれがた

(新萬葉集別)

いこひめてややあり傍の矮生の雑木紅葉をあはれがりけり②

いささかは濡れたる膝のあたり寒し深山の雨に紅葉めでつつ②

いさみたつ駒にくらおけ飛鳥山そめはじめたる紅葉みてこむ①

石階は紅葉のなかに霜しきてたきとぞ落つる霧のうへより①

石階は苔青みつつ見えかくれ紅葉の洞の奥ひそかなり(多磨二)

石垣に絡む紅葉は高ならむ濠水さむくたへたるかも③

石垣の上の公孫樹の散る紅葉昨年の秋にも我は見ざりき②

石を撫で紅葉をかざす楽しみはされども飽きぬ恋ぢあらねば⑩

和泉より紀伊に越えつつ妻とあり小峽の紅葉いまにおとろへず⑭

伊勢町を夜もとほれば植木市あり身に沁むものか小さき紅葉も⑧

磯草の紅葉に並び溜りたる真白き貝の光る朝かな②

いそぐ間に夕日は入て紅葉はのちる音寒しやまの下みち

磯山に紅葉手折りて叱らるる今日のおそびのたのしくもあるか③

甚く寒き日々の続きて鮮けし二階病棟の玻璃の外の紅葉①

下村 海南

植村 武

中島 哀浪

吉植 庄亮

入江 為守

木下 利玄

平野 宜紀

明治 天皇

丸岡 桂

浦谷 千秋

結城 哀草果

隅田 葉吉

與謝野 寛

松村 英一

斎藤 茂吉

與謝野 晶子

香川 景敏

結城 哀草果

鈴木 金二

頂に家たちてあり紅葉見し人ら空しく家立ちてあり①

山頂の紅葉のいろは空に映え小旅五月も暮れづきて来し⑤

頂まで紅葉してはてし山のうへに高田大岳蒼くぞそびゆ⑧

頂きより続くなだりのしもと原めざましき色に紅葉しつくす②

いたづらに紅葉燃えあたり墓原のかくてひとりを曇り日の空①

いたづらに山は紅葉に照りはえたり日の光さへ衰ふる頃を

板に圍ふ清水の淀みゆるら廻り後もどりし一つ一葉の紅葉①

損みそめし広縁つづきひろがれる芝庭あかるきくもり紅葉樹

(気象)

一樹より今舞ひたちし紅葉がさらに溪空にのぼるわざも見す②

いちづに道のない道を来て不思議に美しい紅葉のいろ⑤

いちちはやく桜並木は紅葉して強き秋日にみの虫さがる(朝日短歌二)

一枚の紅葉にはかにくつがへり散るなり人も悲しき時に⑩

一葉の散るものもなし石庭に坐して向へば紅葉も遠き(支柱)

いづくにか吹きうつりある風の音桂の紅葉まれに散りつつ②

いづくまで続く紅葉の路ならむ只あかかと眼疲れぬ④

一山の紅葉おほかた散りつくし枯蓮にそそぐ雨のつめたさ②

一山のゆふ雲を来てにはかにも紅葉明りのはひ立ちたる⑧

いとまなき人もあそびて飯食せり紅葉川原に洋服の父子④

いにしへの貴人の墓殿しみもみじが下になしみて見き⑩

いにしへの片見と人の植ゑつぎし桜若木は紅葉せりけり①

古への尊き人の墓どころ紅葉紅く空に暮れ残る

藤 真

相良 義重

吉植 庄亮

山田 百合子

酒井 広治

杉浦 翠子

伊藤 嘉夫

五島 茂

中河 幹子

矢代 東村

岩田 林右衛門

與謝野 晶子

遠野 左田子

吉植 庄亮

松岡 貞総

中沢 庭柯

吉植 庄亮

中村 憲吉

窪田 空穂

三井 甲之

都筑 省吾

いにしへをおもへば草の紅葉にも心ぞとまる志賀の山越
 岩垣の紅葉が梢はしぐれたり一筋白く瀑の水落つ⑩
 岩垣を高め光の乏しかる峽の夕日にちりちる紅葉(瀬の音)
 岩崖を隠しいろどるもみじ葉か異なるいろの木葉もまじへ⑧
 巖角に燃ゆる紅葉のあかるきに下行く人は面匂ひ見ゆ
 岩が根の紅葉がなかに寺ありて打ちならす鐘響きわたれり①
 岩木山紅葉も見えず雪おけり裸木遠くつづくはたてに
 岩床を走る川水いや冷えてマルハマンサク先づ紅葉せり②
 巖走る滝津下瀬に散る珠と相散る紅葉かも
 岩淵を染めて紅葉のいろ明し奥谷に陽の深くさす頃①
 巖立つ中は川かも散り満ちて湿れる紅葉みな動くなり⑩
 巖山の遠山原を刈り上げて盆景のごとく紅葉ささしめ①
 岩山を皆くれなゐとする紅葉照る日の寒く耀ひ静けし⑩
 言ひたいことも言はず母と子はただ紅葉がきれいに見上げて別れ
 ①
 いましばし枝にあらむとおもひつるもみじも風のさそひつくし
 ぬ②
 今しばしみてはかへら夕日さす岡べの紅葉くれはつるとも③
 今すこし日陰ななめになりぬれば照り面白の片山紅葉⑧
 今を憂へ古を談ず一もとの庭の柿紅葉に午後の日あかし(秋の声)
 妹が住む山もまじりて毛野の山降る雨しげみ紅葉しにけり①
 入笠の御所の手は二色なり紅葉と黄葉あひかさねつつ⑨

村山 松根
 尾山 篤二郎
 佐佐木 信綱
 高田 浪吉
 望月 光
 森山 汀川
 上山 幸子
 高橋 城司
 柘植 潮音
 岩上 とわ子
 尾上 柴舟
 金子 信三郎
 窪田 空穂
 生駒 あさみ
 明治 天皇
 樋口 一葉
 尾山 篤二郎
 佐佐木 信綱
 北原 白秋
 尾山 篤二郎

入りつ日はつひに染めつつ一めん谷の紅葉に燃え付きにけり④
 色あせずのこる紅葉をぬさとしてあかき心に神をたのまむ
 色あせて照りつよき日に縮まれる夏の紅葉のはてのさびしさ⑩
 いろいろの紅葉みだれてちりしくや嵐ふきたつ山のしたみち④
 いろいろの紅葉もあれど枯乏のもみぢのいろをわれはめでなむ①
 いろ色の紅葉のいろにかこまるる御陵にしばし心あらたまる⑥
 いろ濃きは朱そのままに冴えながらあさき紅葉も憎からなくに
 色づくを心まち居し黄櫨の葉の紅葉は浅く散り初めにけり
 岩あれば滝かかりたり滝あれば紅葉にはへり塩原のさと①
 岩だたみ白みをどめる湯の中に見る川遠のいたやの紅葉(豊後雪)
 岩伝ひながれ来る水岩はなれ乱れて落つる紅葉の谷に⑦
 岩の上に楓紅葉と松と生ふ整ひすぎてあはれにし見ゆ②
 岩は皆柱状節理きり立ちてところどころに紅葉そまれる④
 岩めぐれば高ききりぎしきりぎしに危くかかり紅葉のもゆる⑤
 岩山の紅葉にまじり黄に照らふ一樹は何ぞ目に沁みにけり②
 岩よりおちこむ水のいきほひに捲きこまれゆく紅葉一ひら(山勢)
 上川の堤のさくら紅葉してうつろひゆくに君すぎたまふ②
 浮雲につめたくかける入江町そぎへ岩山紅葉してをる
 碓氷四里紅葉を染めて毛の国の稲葉にわたる夕づく日かな
 薄川水片よりて石原に岸の紅葉散りたまりをり③
 うす曇照る日もがもな池水に映る紅葉もすくなくなりぬ(宿墨詠草)
 碓氷峠の紅葉がさけかりにきと三日四日のちに妻の言ひつる②

中村 憲吉
 貞明 皇后
 尾上 柴舟
 樋口 一葉
 三井 甲之
 榊 富照子
 酒井 広治
 林 圭子
 武島 羽衣
 佐佐木 信綱
 窪田 空穂
 山下 陸奥
 四賀 光子
 窪田 空穂
 浅野 豊子
 小宮 良太郎
 藤森 朋夫
 若山 牧水
 川田 順
 久保田 不二子
 岡 麓
 村田 利明

碓氷嶺のやまやま紅葉しこの溪のひときは朱きを妹のいふ⑤
うす日さす梓の紅葉しかすがに今かくるらむただよふ天雲

(新萬葉集一)

朝吹磯子
伊藤 左千夫

うす日さす楓紅葉の並木路おち葉纏きつつ足はたどれる

うす紅葉にほふ前山ほのぼのと虹立ち渡る幾峰かけて②

薄霧を梢にかけて夕陽今紅葉の山のいただきを越す⑩

うそ寒く濁る池水ひからびし紅葉と雲と映りあふのみ⑦

(現代短歌大系)

井上雪下
窪田 空穂
尾上 柴舟
尾山 篤二郎

うちわたす門田につづくくぬぎ原なべて紅葉になりけるかな③

うちわたす山まだ青しいづくよりこの初紅葉をりて来つらむ

うつくしき紅葉の下の花にひとは云はれてあはれるかも①

うつくしき紅葉の山の裾にして水にのぞめる形よき岩⑨

美しくしき紅葉のやがて実りたる枝と覚ゆる七かまどかな②

うつせみのにほふをとめと山中に照りたらひたる紅葉とあはれ⑩

うつそみは常なけれども山川に映ゆる紅葉をうれしみにけり①

うづたかく掃きあつめたる紅葉ばに甘藷焼くときの子らのよろこ

び(巻瀧)

うつつなく紅葉ばやしを行きめぐり出づれば蒼き空はくれたり

移り来てまだ住みつかず白藤のこの垂り房もみじかかりけり⑥

(新万葉集三)

うつわらのちりふきたつる夕風に紅葉みだるる小山田の里①

鵜の島は紅葉しにける岩はなに兎出てゐてぬくとき秋風抄や⑦

昭憲皇太后
北原 白秋

上野駅に吾等つどひてわけ入らむ二荒の紅葉散るときくなり⑤
上のみ庭は山かけにして紅葉の幾むらふかくいまだ朝霧②

馬返駅の前に峙つ岩山の巖の上の小木のもみじ葉②

馬喰はずと土地びとの称ぶ毒草の美しき紅葉二日描きたり①

馬叱る人のこゑする峽間よりなほその奥が紅葉せりけり(白き山)

海近し桜の紅葉満る見てなほ春雨を聞くこちする②

湖の島に照る紅葉に遊べるは耳後へ垂れて番ひ野兎

宇ら悲し心こふらなくさむ深山に入れば紅葉まさかり①

うるし紅葉のからくれなるの傍に炭蔭の葉は青く厚らに⑬(白き山)

うるはしく紅に白きをうちまぜて残る紅葉に初雪ぞ降る①

駅よりすぐに紅葉の神光院へいそぐなり次は蓮月尼の伝記をかくと②

と②

柄のあれば松屋紅葉も桐の葉舞子の傘に拾ひおかまし⑫

円覚寺人かげまばら閑けきにまだ紅葉せぬ重き枝枝(き)

老妻に見せむと思ひて我が来にし山の紅葉はいまだ早かりき

老ゆらくをかなしと思はじ楓葉はうつろふ頃に紅葉染めたり①

大沢の池の塘の薄紅葉照りいづるほどをきたりけるかも⑤

(現代短歌大系)

大堰川ゐせきの波にうつろひてちらぬ紅葉の影ぞただよふ①

大椿繁る隣に紅葉して散りいそぎつつある楓あり②

大宮のそがひの森の紅葉はいまだ過ぎねば梅の花さく

大湯川しだいに山となるほどにうすき紅葉を岩々に置く⑪

今井邦子
山下 陸奥
広野 三郎
加藤 洵綾
斎藤 茂吉
與謝野 晶子
北原 白秋
藤 真
斎藤 茂吉
與謝野 禮巖
土岐 善麿
與謝野 晶子
村尾 圭介
村上 成之
南原 繁
尾山 篤二郎
明治 天皇
村野 次郎
望月 光
與謝野 寛

岡裾にはなれてならぶ大御堂渡殿長し紅葉の下に⑩

丘の間に稀々澄める川ありて鶏の血のごとく紅葉する草

拝み了へてまかで来にけり広前のひともち紅葉眼には映りぬ

起き出でてみるあかつきの裏山の紅葉の山に雪ふりにけり

奥の院への石段のぼる日のさしてただにきらめく紅葉する谷①

おく山にいまだ残れる一むらのあづさの紅葉雲に匂へり

(新萬葉集一)

奥山の道は木の間に秋ふけておそきもみぢ紅葉にかがよふ

奥山の峰の紅葉を折り取ればいづくとも知らず猿啼く声①

小倉山ゆかりのあとを尋ねてきて紅葉一ひらをつつしみ拾ふ①

おしつまるわが残生の一日を紅葉まばゆき谷にま向ふ

恐れなきかの生きざまに脅えつつ今日きて草の紅葉に憩ふ⑥

小樽市を囲める山は紅葉せりと心に沁むるたまゆらもあり④

落ちつもりし紅葉を踏みて入り来るバルビソンの森鴉のこゑす⑤

落葉掃く簞の音は何辺かも築山紅葉の夕冷えの光沢(一路)

落ちまさる紅葉の山の下露に濡るるけものもあらむかはれ⑦

夫よ見ませ桜紅葉のすがしきを声立てて呼ぶ朝の窓べに

おのづから乾きておつる紅葉の音を聞きし暮もありけり

おのづから梢いろづく庭紅葉下葉はいまだあさみどりにて

おぼただしき落葉なるよと石の上見つ一本紅葉の散りつくせるな

り(立秋)

大堰川のさくらの紅葉ちりうきてゐせきの波に秋風ぞ吹く①

窪田 空穂

土屋 文明

川田 順

若山 牧水

松井 如流

伊藤 左千夫

松村 英一

正岡 子規

太田 青丘

武田 祐吉

宮 柊二

竹尾 忠吉

斎藤 茂吉

木下 利玄

尾上 柴舟

原 あや子

井上 文雄

国武 史郎

川田 順

明治 天皇

大き峠を津輕に越えしばかりにて山の紅葉のひたすら冥し⑧

大き紅葉溪の流れに傾きて水際に匂ふくれなゐの照り①(多磨二)

大谷へ骨を納めにのぼり来し日もはるかなり紅葉も過ぎて②⑥

大椿繁る隣に紅葉して散りいそぎつつゐる楓あり②

大寺の紅葉はすでに散りたれどのこれるものは霧にぬれたり⑤

大庭の紅葉の上やわたるらむまぢかく雁の声きこゆなり①

大比叡の水をひきたるとつみやの滝つながらに紅葉かつちる

(新萬葉集別)

御召列車近づきたまふ山の原眞昼あかるく紅葉かがよふ

(新萬葉集七)

面影にたつ花紅葉それならで匂ふものなき冬がれの森①

思はざる行く午の紅葉おもはざる眼下のもみぢ富士名残り惜し①

おもふどちはやしの紅葉うちそへて裂けあたたためてあそぶ今日か

な③

おもむろなる推移に浄き象あり寺山紅葉雨に散りつつ⑦(毎日歌壇)

親と子と酒くみ居れば紅葉の過ぎにし兄の思ほゆらくも⑧

おりたてば雨多き秋の草紅葉湿りたもちて冬野のほひ②

御書斎に父永久にまさず愛でましし庭の紅葉の今日さかりなる③

おん舟に居こぞる人の袴より赤き紅葉の島さして来ぬ(舞姫)

おん前の板谷楓が万山の木にさきがけて紅葉せる見ゆ⑤

甲斐がねをかすめて散りぬ大垂水尾花の台のさくらの紅葉

(心の風景)

吉植 庄亮

清水 乙女

土岐 善磨

村野 次郎

尾山 篤二郎

昭憲 皇太后

千葉 胤明

二木 好晴

武島 羽衣

萱沼 利子

樋口 一葉

照井 親資

島木 赤彦

長沢 美津

朝吹 磯子

與謝野 晶子

中原 綾子

與謝野 晶子

回遊式庭園のみぎはに立つ紅葉夕陽照り添ひ輝くところ(青雲)
 帰り来は幾年ぶりぞふるさとのとがれる山も紅葉せりけり④
 鏡なすけふのところに照りうつる山辺の紅葉かなしかりけり⑬
 かがやける山沢のべの紅葉はこの現つ世のものにぞありける⑩
 かきくらし散り来し紅葉この山の一めんの紅葉のなかにあとなし

⑧

柿紅葉枝はなるるありおし黙り一人歩める狭の畑に③

柿紅葉明るき山になごむさへ老い至るがにわれはさびしき①

柿の木はさらに見えぬを石敷のここに散りある柿紅葉かな

柿紅葉時雨のあめに散る見つつ短き一日友といふ①

柿紅葉あかあか照らふ庭にしていただに置かれたる石さへ清し

柿紅葉上枝はいつか散りすぎて百舌鳥ぞ来て啼くおほかたの日を

掻き分けて橡の葉拾ふ奥山の紅葉の中に聖者もありと②

学徒らが作りし壕の上に散れる桜紅葉をひとり見にけり①

影いつか紅葉にまじるときは木のむら濃に高き山となりたり②

(新万葉集三)

崖のつちはろろ散る日の秋晴に漆紅葉のさびしくも燃ゆ

笠置山夜討が攀ぢしからめ手の岩かけ寒き鳥紅葉かな

檜鳥の鋭声聞きあゆむ日向山栗の紅葉は照りてあかるし

春日野の森のゆふぐれやうやくに桜紅葉は仄けくなりぬ③

化石のごとき貌して堪ふる十月ののこり紅葉よ何嘆かしむ⑥

風づつみよくしていませ時雨ふり紅葉のちらく寒き山道⑥

石田 成太郎

岡野 直七郎

若山 牧水

斎藤 茂吉

吉植 庄亮

木下 利玄

吉田 正俊

川田 順

久保田 不二子

松岡 貞総

若山 牧水

與謝野 晶子

窪田 章一郎

小田 観螢

若山 牧水

川田 順

金田 千鶴

九條 武子

斎藤 史

島木 赤彦

風のあと掃かれし如き地肌して霜に染みたる苺の紅葉⑩

風ませにまどうつ雨とおもへしは軒の紅葉のちるにぞありけり④

片がはは紫橘子のふくさ帯べにの紅葉のなつかしきかな(みだれ髪)

傾きて狭きひまより照らす陽に峽の紅葉は今しあかるき⑫

勝ちし君も負けたるものもみじめなる顔みとめあふ折ふしがあり

①

葛もて編むふくろなど山に欲し草紅葉さへ摘みて入るべく⑬

門^{かど}入れば庭の楓の散紅葉さびしくもあるか町のかへりに(山桜の歌)

門を入れば濃き柿紅葉そのかみの鈴木少年の喜びし樹か(山と水と)

革色の櫓の紅葉と並びたる落葉松の木の沙金のみみぢ②

買ひてもつ苺の苗は青き葉に紅葉してあかき葉のまじりたり④

峽の門を飛ぶ小鳥なし吹き散らふ紅葉の光ここにたゆたふ②

峽ふかくバスは巡りてつぎつぎに頭はるる山紅葉ならぬなし①

峽を来てここにとどろく工場あり紅葉はなべて灰しろく積む⑧

壁にからみてほろびのまへのひとときの紅葉うつくし鳥の群葉の

(はつゆきおこし)

かへり来よ桜紅葉の散るころぞわがたましひよ夙く帰り来よ③

かへり花咲ける桜に晝聞けて日光照り透く紅葉にまじる④

かほりみる谷の紅葉の明らけく天にひびかふ山がはの鳴り①

かへるでの紅葉そよがしたぎち落つる水見てあれば寒さおぼゆる

①

神神の集ひ宿らす仮宮のいならびたまふ紅葉照る下③

松村 英一

樋口 一葉

與謝野 晶子

尾上 柴舟

栗原 潔子

與謝野 寛

若山 牧水

佐佐木 信綱

與謝野 晶子

佐藤 佐太郎

山本 友一

関 得一郎

松村 英一

鹿兒島 やすは

若山 牧水

若林 牧春

斎藤 茂吉

中村 美穂

山下 陸奥

神路やま麓をい往きまかりつつかなしくも見ぬ燃ゆる紅葉を②
神憑きの堀と、かたりあはむ為、槿の紅葉の村に、来たれり⑦

三浦義一
堀内一葉

神無月おくもしろき朝廷にかぜもふきあへずちる紅葉かな
からからと柿の紅葉の風にちるひびきも寒し秋のくれがた①

金子元臣

硝子戸ゆまともに見ゆる岩崩えの八峯の紅葉末枯れはてたり①
から松と紅葉のひまに峰あまた秋のひかりに微笑めるかな⑪

森山汀川
與謝野寛

刈り残す櫓のもみじのかげ映す山田のみず手を洗ひけり①
かりみやの軒端をあさみ玉だれのをすの内まで照る紅葉かな

藤原東川
昭憲皇太后

枯木なす冬木のはやし行きゆきてゆきあへる紅葉にこころ躍らす⑬

若山牧水

枯草の荒野につづくいただきの鳴虫山の紅葉之しも⑬
枯芝の照る彼方水仙の園展け此方紅葉のかざす苔地あり⑤

若山牧水
吉野秀雄

枯松葉に紅葉もまじり降り込める廊下を踏みて通ふ書斎に③
枯水の池に紅葉のしづみゐて陽がさす時にあやしく赤し①

中沢庭柯
藪阿久里

川魚の皿に紅葉を添へし夕餉の膳にならびて坐る②
川づたひ谿の平みに日をうくる駅ひそかに紅葉にほへり

高橋希人
島木赤彦

(馬鈴薯の華)
川原に細石あることも心ひく石の間に短く紅葉する何草ぞ

土屋文明

閑雅なる形に見えて琴柱燈籠紅葉木とともに池に映れり
(とよはた雲)

佐野千山

神無月しぐれそめたる空みれば散らぬ紅葉もさびしかりけり④
木がくれてあれどもつねにみえざりし谷間の紅葉あらはれにけり③

樋口一葉
樋口一葉

聴きしめぬはだら夕日の苔の上にちらふ紅葉のかそかなる音

藤田富子

(曼茶羅)

木々の紅葉闇ににじみてゆきしかば夜の灯部屋にあかるくともす

小宮良太郎

⑤

木木の紅葉すでに散りつくしいちめんに静りふかし山の上の雨①

小泉荻三

木々のみな低き群山紅葉して片照る峽に入らんとするも④

金子不泣

菊紅葉秋のさかえの錦きて八十もとせの君は山姫⑩

太田水穂

菊もかれ紅葉もちりて庭のものは雪よりほかにまつものぞなき④

樋口一葉

きこえる遠瀬のひびき谿底の紅葉を照らす日はしづかにて①

野沢柿葺

木崎の湖船こぎ行けば暮近き紅葉の森に雪の山高し⑥

島木赤彦

汽車の音におどろき走る馬一つ野ははろばると草紅葉せり

生田蝶介

(新万葉集二)

季節おくれの紅葉の造化マアブルの壁が汗かくあついストオブ④

西村陽吉

木曾谿のふるき家並に紅葉はえ割ごに賜びし栗飯ぬくき

平塚修子

木曾谷の紅葉を見たきおもひして目ざめし朝や霜ふりにけり②

高田浪吉

木曾山の紅葉夜の雨朝晴にそは路さやけくあゆむ楽しさ①

蔵真

北巨磨の紅葉かつちるみ山路に夕べたらずむ富士に向ひて

平井大壑

(多磨四)

来て見れば山うるしの木にありにけり樺の林の下草紅葉(山樺の歌)

若山牧水

砧うち紙に紅葉を摺りつくる古きあそびを今の子もする⑤

若山喜志子

きはまりし谷の深さや岩肌に燃ゆる紅葉のひとむらがあり

三木小兩

(多磨四)